徐才厚問題から中国軍の戦闘力を見る

漢和防務評論 20140902(抄訳)

阿部信行

（訳者コメント）

習近平が主席になってから、党の指導層にあった超高級幹部の逮捕劇が続いています。中国では、文革時代から政敵に対するセンセーショナルな壁新聞記事が盛んでしたが、現代ではインターネット上で、微に入り細にわたり検挙に至った経緯がゴシップ記事として流されています。 流布された事件の内容を見ると、こんなことが有り得るのかと思うほど酷い内容です。さすが中国はスケールが違うな、と感心した次第です。 その原因について、漢和防務評論誌は、中国の政治、軍事制度の異常さを指摘しています。中国はこのまま年月が流れれば、いずれ第二の文革が起きてもおかしくない状況になりましょう。

中国軍の戦闘力は、核潜水艦の数や J-10・J-20 型戦闘機の数では表現できないと KDR は考える。徐才厚（総政治部主任）事件のような超高級軍人の汚職事件は、米国、日本やかつてのソ連でさえも起こり得ない事件である。人材は、戦闘力を計るバロメーターと言われている。一国の軍の最高指揮機関の副主席であり、大将の階級にある者が自ら汚職に手を染め、買官売官に走り、後者は特に酷かったようだが、このような軍人が作戦を指揮できるのだろうか？

反腐敗の信念は、習近平個人の魅力であるが、誰が徐才厚のような人物を造り出したのであろうか？それも 1 件だけではない。徐才厚事件が起きる数年前、トロントの本誌編集部のタイピストは解放軍第 16 軍の退役幹部であった。彼は、徐才厚が吉林省軍区幹事のとき、互いに知り合った。彼の徐才厚に対する評価は：まじめで、温かく、無口であり、物事に常に公平に対する好人物であった。彼は、付和雷同するタイプではないので、最近の徐才厚に対する評価を信じなかった。

本誌タイピストの証言は、他の情報源から確認を得た：徐才厚は、北京在住時、家にエアコンが無かった。上司が持ってないからというのが理由であった。（ネット上で披露された古い友人の証言）徐才厚の早期の性格は、絶対的従順さである。このようなまじめで温かい人が、後に何故汚職に走り、女に溺れたのか？”そうだ、彼は笑ったことが無かった。ある時、周囲の人が女性兵士のことを話した時、彼は必ず制止した。彼の性格は絶対に偽装ではなかった”と。タイピストはこのように述べたことがある。

結論は以下の通り：制度の腐敗が彼のような人物を造った。軍事制度しかり、政治制度しかり。
ネット上に大量に公開された検挙の事実を見ると、同時期にもう一人の軍事委員会副主席郭伯雄が汚職で検挙されている。これらの検挙の証拠となる事実は本誌にも寄せられているが、記述された内容の詳細を見ると、職権の濫用とか、家族や側近、女性を空軍専用機に乗せて観光旅行したとかの実態から、内部の人間が事実をもって告発したに相違ない。
胡錦濤時代、二人の副主席のうち、一人は軍の人事を主管する総政治部主任で、副師団長級以下の幹部を直接任名する権限があった。もう一人は装備品の購入を主管しており、いずれも巨額の汚職を行った。このような軍隊は戦えるのか？腐敗した制度が二人の副主席の巨大な腐敗を造ったのだ。
まず第一に政治の腐敗を見よ！政治委員の意味は何か？ロシア語ではKOMISAと言い、党代表の意味である。これは、ソ連で創設された制度であるが、中ソ両国の KOMISA 制度には大きな違いがある。

ソ連の 10 月革命が成功したのは、軍の長期間にわたる武装闘争によるものではなく、CHEKA（後の KGB)、水兵の蜂起によるものであった。
革命に成功した後、トロッキーが創建した赤軍の最大の困難は、下層兵士は信頼できるが、自ら養成した高級指揮官が不足していたことである。ジューコフのような名将も当時はみなツアーの軍隊の将校出身者であった。これらの将校達を如何に監視するか？党は、軍に党代表（KOMISA）を派遣した。当時、政治委員を専門に養成するレーニン軍事政治学院は未だ出来ていなかった。したがって党代表は基本的に軍人ではなく、作戦指揮権を持たなかった。第二次大戦のソ連軍の歴史を勉強した学者は気が付くはずだ：作戦命令への署名は、一般に司令官、参謀長、政治委員が署名する。しかし実際上、政治委員は作戦指揮の責任を負わない。映画「熱と血」は、ソ連軍政治委員の役割を集中して表現しており、根本的に軍事行動の会議には参加していなかった。
中国軍の政治委員は、全く異なる。革命の勝利をもたらしたのは、長期の武装闘争であり、元捕虜或いは地方で軍に参加した農民を如何に導くか、が中国軍政治委員の主要な仕事であった。林彪等、軍の指揮官は不足していなかった。彼らは、黄埔軍校時代から党員であった。したがって政治委員は作戦を知らねばならず党委員会は作戦計画に対し責任を負った。開戦時、政治委員は、直接下層の兵士を率いて作戦を指揮した。

このように中国の総政治部は、ソ連軍の総政治部に比べ、権限が極めて大きい。
前者（中国の総政治部）は、

(1) 作戦附議権を有する。
(2) 副師団長級以下の軍人を直接任命することが出来る。
(3) 自ら巨大な情報機関（敵工部一連絡部）を保有する。
(4) 全軍最高の軍事法廷、検察院を保有する。
(5) 保衛部は軍内の対スパイ工作を担当する。この職務はソ連では KGB が負っていた。

簡単に言えば、中国の総政治部は巨大な軍事権力を保有している。林彪事件以降は表面上、確かに兵の指揮権は全て軍事委員会主席に集中しているが総政治部主任は、以下に述べる方面から指揮権を左右することが出来る：

A. 副師団長級以下の軍人を自ら任命することが出来る。買官売官の結果、買った軍人は総政治部主任の命令しか聴かず、必ずしも胡錦濤の言うことを聴かない。胡錦濤は軍内の威信が極めて低く、西山の作戦部指揮所にいる軍事委員会主席（注：胡錦濤）に会いに来た軍人はほとんど無かった。これは KDR も知っている。本当に有事になったら、彼は必ずしも軍を動かす力は無かったのではないか。しかし習近平は、常に西山の総参謀部作戦部に気を使い、或いは自ら演習内容を審査し、軍人に対しては、自分が如何に軍隊を熱愛しているか、軍隊を理解しているか、を表明している。

B. 政治闘争に直接介入する力は、ソ連軍の総政治部よりも強い。これが江澤民が徐才厚を通じて胡錦濤をコントロールできた理由である。中国の総政治部は、自分たちのスパイ機関及び対スパイ機関並びに保衛部を保有している。これらの“ミニ武装戦力”は、総政治部主任が自ら指揮し、動かすことができる。この点は無視できない。今後また血なまぐさい事件の発生源になる可能性があるからだ。

C. 軍の最高法院を掌握することは、各種の名目で軍内の反対者を除外し、粛清することができる。中国軍の人事制度によると、正師団級以上の幹部の任命は、軍事委員会主席の直接認可を必要とする。しかし総政治部主任は推薦権を持っており、政治審査の名目で対応策を実施することができる。或いは、軍区の法院や総政治部の法院（審判師以上の幹部）を指揮し、その他の理由付けで粛清することが可能である。今回の徐才厚事件は、かつて自分が管理していた法院が直接審理している。

その一、作戦指揮ができない軍人は、軍人といえるのか？本誌は、徐才厚が写

った全ての写真を取り寄せて確認したが、残念ながら彼が演習を指揮している写真は見当たらなかった。洪水被害対処を指揮した写真はあった。また彼が軍事地図を見ている写真が 1 枚もなかった。大将の階級といえば、ソ連軍では、長年総政治部主任を務めたイェビシャフ大将に相当する。徐才厚は、軍用地図が読めたのであろうか？本誌は疑問に思っている。
KOMISA が党代表の意味だとすれば、徐才厚の問題は、まず第一に彼が代表する党の問題であるはずだ。腐敗は、党から始まり軍に蔓延していく。

その二、現代の文明国家において、軍人に対する処罰の基準は一般国民に対する基準とは異なる。部下の犯罪について、上級の指揮官は責任を回避することができない。副主席徐才厚を主管していたのは誰か？当然、胡錦濤主席である。したがって胡錦濤は、本来徐才厚の腐敗に対し責任を負わねばならない。しかし残念なことに、徐才厚及び郭伯雄は、院政を敷いた江澤民の代弁者であったため、名目“主席”の地位にあった胡錦濤に責任を負わせることは冤罪となろう。

このことから政治制度が大問題なのである。誰が党、軍隊、国家の法人格を代表するのか？胡錦濤は凡才であった。主席当時、腐敗問題を取り上げ、徐才厚及び郭伯雄を排除すべきであった。胡錦濤は正統の主席であり、きちんと筋を通すべきであった。

その三、軍の制度にも問題がある。現代国家に”総政治部”が必要だろうか？大将から大尉まで膨大な数の政工幹部（政治工作を担当する）を養っている。他に各種歌舞団や部内新聞社、映画製作所、テレビ放送局、交響楽団、体育工作隊などなど、全て腐敗しており、女性問題の温床となっている。軍人に求められるものは服従である。歌舞団ではどうすれば良いのか？どのように服従するのか？誰に服従するのか？将軍及びトップは、必ず歌舞団の女性と寝たがる。彼女らは敢えて拒否できるだろうか？その上、巨大な余禄がある。したがって徐才厚の女性問題は、不思議でもなんでもない。軍事制度の欠陥である。彼は当時、他人が女性兵士のことを話すのを聞いただけで赤面した、という。

要約すると：現代国家においては、軍人は国軍の軍人である。軍隊は国家の軍隊である。総政治部は余分である。軍隊に党代表は必要ない。これは中国軍事制度の重大問題である。言い換えれば、軍事費の面から見ると、政工幹部は少なくとも軍の人事関係費の三分の一を消費しているという。これが腐敗の主要な源泉となっている。なぜなら各級の軍隊の単位を主管するのは指揮官ではな

く政治委員であり、彼らは歌舞団、テレビ放送局も主管する。著名な湯燦（注：国民的歌手、公共情婦とも称され中国共産党上層部を揺るがせた女性）は古い政治委員が推薦した。

軍の指揮の面から政治委員を見る。中ソ軍隊の KOMISA の職責は一部共通している。一旦開戦となれば、政治委員は全軍の政治、思想工作を担い、士気を鼓舞する。政工幹部は逃亡兵に対し、戦場における生殺与奪の権力を保有する。しかし政治委員は、将兵に比べ腐敗しているのではないか？将兵を感服させることができるか？政治委員の指揮に服従するだろうか？次に、将校が政治委員を通じ、買官によって任命されたのだとしたら、そのような将校の資質は如何であろうか？
政治委員制度は、かえって戦闘力を弱化させる源泉になっていないか？
中国の軍事指揮制度は、実際上二重の首長制になっている。ソ連軍は、単一の首長制であった。二重の首長制とは、党委員会を通じ、直接部隊を指揮し、相互に人脈・派閥を監督する。各部隊の政治委員及び主官（名目上の指揮官）は、それぞれ自己の人脈・派閥を有している。当時の毛沢東の構想では、このような矛盾した機構を通じて、政変を予防した。このような組織は現代の国軍とは言えない。二重の首長制では、作戦指揮は不可能である。指揮の失敗は、誰が責任をとるのか？
徐才厚問題は、政治運動方式による反腐敗キャンペーンが求められるのではなく、中国の政治・軍事制度の再検討が求められている。

以上